

令和6年度 学校経営計画に対する自己評価計画最終評価報告書

P 1 / 6

石川県立穴水高等学校

重点目標	具体的取組	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	分析(成果と課題)及び次年度の取り扱い(改善策等)
1 生徒自身が自己の目標を見据え、課題に対して主体的に・継続的に取り組む姿勢を養う。	①進路選択に係る講話や体験活動等をとおして、キャリア意識の向上を促す。	【成果指標】 生徒各自が目標を達成できた。 アドバンスクラス(A組) 模試偏差値 ベーシッククラス(B組) 漢字検定 キャリアコース(C組) 商業検定	模試における英数国合計の偏差値が 55 以上の生徒が受験者の A 50%以上 B 40%以上 C 30%以上 D 30%未満 漢字検定準二級保持者の割合が A 50%以上 B 40%以上 C 30%以上 D 30%未満 商業各種検定合格率が A 75%以上 B 65%以上 C 55%以上 D 55%未満	アドバンス [11月模試] 1年 D (1人／12人) (8.3%) 2年 C (3人／9人) (33.3%) ベーシック 全年年 D (24%) キャリア A (76%)	成 果: 2年生の 11月記述模試における国数英の 3教科平均点偏差値が 55.5 となった。これは 1年 7月記述に比べ 6 ポイント程度上昇したこととなる。 課 題: 生徒が自らの進路について考え、実現に向けて主体的に努力しようとする意識や向上心が不足している。また、教師側も学習の見通しを示して学習課題を適時適切な分量を出す必要がある。 改善策: クラス担任による進路面談や進路希望調査をもとに、進路指導課から進路選択に係る調査を実施することで生徒の主体的な進路選択を促す。来年度から 3年生において、家庭学習時間の向上と苦手教科・科目の克服をねらってスタディサプリを導入する。 成 果: 1月の検定で 2年生 4名の合格者が出て、3年生と合わせて 10 名となった。2年生から 2 級合格者が 1 名出た。 課 題: 3年生は、震災により受検機会を奪われ、春の受検が初となり、保持者は 6 名しかいない。1年生は中学時代に受検したことがないため、3 級からのスタートとなる。 改善策: B組全体で「資格取得」の計画を来年度の検定日程からさかのぼり、ポイントを押さえて取り組む。目標を明確化する。 成 果: 目標の 75%以上を達成できた。 課 題: 個人が設定した目標級に合格できなかった生徒もいた。 改善策: 学習指導の前に目標設定に向けた面談を取り入れる等、個別最適化された学習機会を提供する。

重 点 目 標	具 体 的 取 組	評 価 の 観 点	実 現 状 況 の 達 成 度 判 断 基 準	判 定	分析（成 果 と 課 題）及 び 次 年 度 の 取 り 扱 い（改 善 策 等）	
1 生徒自身が自己の目標を見据え、課題に対して主体的・継続的に取り組む姿勢を養う。	②習熟度(類型)別の授業・補習や学習課題等をとおして、自ら学ぶ意欲を高める。 ③教育ICT環境を活用し、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実をとおして、確かな学力を養成する。	【成果指標】各クラス(コース)において基準を達成した生徒の割合が アドバンスクラス(A組) 2時間以上 ベーシッククラス(B組) 1時間30分以上 キャリアコース(C組) 1時間30分以上	各クラス(コース)において基準を達成した生徒の割合が A 70%以上 B 60%以上 C 50%以上 D 50%未満	アドバンス D (20.6%) ベーシック D (4.8%) キャリア D (14.8%)	成 果：各クラスにおいての平均学習時間は1.4、0.7、0.6時間で、A組は前期と比較し学習時間が増加、基準達成者の生徒の割合が10%以上高くなった。 課 題：B組の平均学習時間及び基準達成者の生徒が減少した。また、全体的に学習時間の入力割合も減少傾向にある。 改善策：各クラスにおいて自己の目標達成のための適切な課題を各教科で課し、スマールステップで短期的目標の達成感や成功体験を生徒に感じさせ学びを習慣化する。	
学校関係者評価委員会の評価		・学習時間が少ないことの課題について、学校として対策をしっかりと打ち出す必要がある。 ・大学進学を進路としない生徒の学習に取り組む背景が薄い。学ぶことが自分の将来にどう繋がるかを理解させながら、学力の底上げをしてほしい。				
評価結果を踏まえた今後の改善策		・授業や家庭学習において、生徒が主体的に学習を行える方策を具体化していく。				

重 点 目 標	具 体 的 取 組	評 価 の 観 点	実 現 状 況 の 達 成 度 判 断 基 準	判 定	分析（成 果 と 課 題）及 び 次 年 度 の 取 り 扱 い（改 善 策 等）
2 規範意識と協調性を高め、自他を思いやる心を醸成する。	①学校内外の日常生活の場面で、T P Oを前提とした判断と言動ができるよう支援する。	【満足度指標】規範意識を持って、自発的に行動することができたと考えている。	自分から主体的にT P Oに応じた挨拶や言動ができているか。	97.6% (A+B) 70%以上達成 A とても出来ている B 出来ている C あまり出来ていない D 出来ていない	成 果：挨拶の重要性に関して、日々の学校生活の中で生徒に指導してきた。毎朝の登校指導を行うことで、生徒とのコミュニケーションをとることができた。 課 題：校内での挨拶はおおむね良好であったが、校外での挨拶に関しては、まだ改善の余地を残す。意識改革はでききたが、もうワンランク上を目指す必要がある。 改善策：あらゆる機会で挨拶の重要性を指導していく。来年度も朝の登校指導を行い、生徒とのコミュニケーションを欠かさないようにする。
	②学校行事や課外活動をとおして、多様性を尊重しながら協働できる姿勢を養成する。	【満足度指標】学校行事や様々な校外活動により、良好な人間関係を築き、何事にも主体的かつ積極的に取り組むことができる。	様々な活動をとおして、他者と良好な関係を築き、協働できているか。	92.8% (A+B) 70%以上達成 A とても出来ている B 出来ている C あまり出来ていない D 出来ていない	成 果：昨年度より 2.3%増加している。震災の影響があり、制限される中での学校祭・体育祭等の行事であったが、少人数の強みを活かし、学年を超えてより良い人間関係を構築している。 課 題：本校は小中学校からの関係性もあり、良い人間関係を築けている。ただ一定の生徒が企画・運営に携わっている状況が見られ、多くの生徒が主体的・積極的に関わっていない。 改善策：生徒の長所や持ち味に気づき、それぞれに合った役割を与えることや、日頃からチャレンジさせるような声かけを教員側が増やしていく必要を感じる。
学校関係者評価委員会の評価		・挨拶等のコミュニケーション力は社会人として大切な項目である。その能力の育成については、小学校、中学校とも協力し、家庭・地域・学校で連携して育てるようにしてほしい。			
評価結果を踏まえた今後の改善策		・挨拶の重要性について日頃より啓発し、生徒の積極性を引き出していくような仕掛けや取組を具体的に実践する。			

重 点 目 標	具 体 的 取 組	評 価 の 観 点	実 現 状 況 の 達 成 度 判 断 基 準	判 定	分析（成 果 と 課 題）及 び 次 年 度 の 取 り 扱 い（改 善 策 等）
3 地域との交流・連携を密にし、地域を理解し貢献しようとする姿勢を養う。	①地域資源(自然・人材・団体・企業)や他校種と連携し、地域理解を深め、探究する力を養成する。	【満足度指標】生徒が地域のために課題意識を持って、積極的に関わり、地域への理解を深めている。	地域の課題解決に向けて、積極的に地域と関わり、地域への理解を深めることができているか。 A よくできている B できている C あまりできていない D できていない	80.7% (A+B) 70%以上達成 A22.9% B57.8%	成 果：上半期時よりも7%増加している(昨年よりも10%増加)。探究活動や地域について考える意識の向上が見られ、地域探訪活動等の効果が表れているように感じる。 課 題：生徒たちが地域について考えるためにも、より地域と連携して授業の構想を立てる必要がある。 改善策：探究活動が重要になってきていることを踏まえ、探究プログラムを推進している大学や他校との連携を考え、地域とのどのように関わりを持つのが良いか検討していく。
	②地域ボランティア等へ積極的に参加し、地域貢献意識を高め、課題解決力を養成する。	【満足度指標】地域のボランティアやイベントに参加し、地域に貢献できているか。 A よくできている B できている C あまりできていない D できていない	地域のボランティアやイベントに参加し、地域に貢献できているか。 A よくできている B できている C あまりできていない D できていない	69.9% (A+B) A14.5% B55.4%	成 果：昨年度より11%増加している。震災関連のものもあり、数多くの生徒がボランティアに取り組んだ。自ら希望して取り組む生徒が増えたように感じる。 課 題：より多くの生徒が自ら希望して参加する雰囲気の醸成が必要である。 改善策：教員から生徒への声かけだけでなく、生徒同士で参加を促すような仕掛けづくりや、取り組んだことへの満足感や有用感を共有していきたい。
	③ホームページ等で、教育活動や生徒の様子を積極的に情報発信する。	【満足度指標】ホームページや学校だより等をとおして、適切に学校情報や教育活動の様子がタイムリーに発信されている。	学校情報や教育活動の様子を知ることができる情報発信が、適切になされていると感じている保護者の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	A (96.6%) A68.2% B28.4%	成 果：目標数値を上回る結果となり、上半期のAの数値よりも2.7%増加した。 課 題：AとBを合わせた数値は上半期よりも2.2%減少した。回答数が上半期よりも4.5%増加していることが原因であると考えられる。 改善策：高い数値となっているため、引き続きタイムリーな情報提供を行い、より生徒の声が発信されるように心掛けたい。
学校関係者評価委員会の評価		<p>・震災により生徒がやや萎縮している感がある。今後も震災復興関連のボランティアの機会は沢山あるので、生徒の自発的な地域貢献活動をすすめてほしい。</p>			
評価結果を踏まえた今後の改善策		<p>・ボランティア活動や、「総合的な探究の時間」でのフィールドワークの求めや企業・大学との連携の面で、専門的なコーディネーターが必要である。</p>			

重 点 目 標	具 体 的 取 組	評 価 の 観 点	実 現 状 況 の 達 成 度 判断 基 準	判 定	分析（成 果 と 課 題）及 び 次 年 度 の 取 り 扱 い（改 善 策 等）
4 学校の教育力向上のため、組織力を高め、教師力の充実を図る。	①授業改善と資質向上に主体的に取り組むとともに、組織的思考力や組織的行動力を高める。	<p>【努力指標】 年3回の互見授業ウイークを設定し、それぞれ2回以上参観することとし、本校の授業の質向上を図る。</p> <p>【成果指標】 年間研修計画に即して、研修を実践する。各期の若手が確実に力をつけるとともに若手教員が講師を行う場面を設定する。</p>	<p>互見授業ウイーク中2回以上参加した職員の延べ割合が</p> <p>A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p> <p>校内研修の実施回数（互見授業・研究授業・講師役も含む）が</p> <p>A 25回以上 B 20回以上 C 15回以上 D 15回未満</p>	A (100%) B (22回)	<p>成 果：複数回の互見授業の設定により同教科だけでなく他教科の授業も参観でき、自己の授業改善に活かせる新しい発見や改善点を見出すことに繋がったと考える。</p> <p>課 題：生徒が主役となった対話的で生徒の気づきや深い学びのある授業を増やす。</p> <p>改善策：生徒の活動や対話の多い授業を参観し、自己の授業に活かせる部分を吸収し、実践し、振り返りをするサイクルを意識して改善していく。</p> <p>成 果：若手教員早期育成プログラム年間指導計画に基づき、計画を進めることができた。年間計画のほかに、各課の研修にも積極的に参加することで、充実した研修を行うことができた。</p> <p>課 題：互見授業も年間6回、研究授業も1回以上参観しているが、若手が講師となる研修を行うことができなかつた。</p> <p>改善策：この数年間で基本的な部分の研修は、一通り行うことができたので、今後は、若手教員が活躍できる研修を模索する必要がある。</p>

重 点 目 標	具 体 的 取 組	評 価 の 観 点	実 現 状 況 の 達 成 度 判 断 基 準	判 定	分 析 (成 果 と 課 題) 及 び 次 年 度 の 取 り 扱 い (改 善 策 等)
4 学校の教育力向上のため、組織力を高め、教師力の充実を図る。	②業務改善の意識を持ち、効率的・効果的に業務を実践する。	【成果指標】各種業務の精選や重点化等を意識し、組織として効率よく効果的に業務に取り組んでいる。	職員ストレスチェック集団分析において、「仕事の量的負担・仕事のコントロール」項目と、「職場支援」項目におけるストレスリスクが県内平均に対して A 両項目とも下回る B 片方が下回る C 両方とも高い D 全国平均をこえ、高リスクである	B	成 果：「仕事の量的負担・仕事のコントロール」項目は下回るが、「上司・同僚等の職場支援」項目は上回る。ただし、総合健康リスクは全国平均 100 に対して 95 と低いリスクである（石川県の団体平均は 89）。 課 題：少人数の職場で、課内業務を複数で当たることができず、個人業務となるものが多々ある。また、校内の諸々の業務が、特定の職員の負担となる場合もある。 改善策：ストレスの高い項目に、身体的負担度からくる疲労感や身体的愁訴などの身体的反応、職場環境によるストレス、同僚からのサポートが足りない等がある。震災による施設面での不備はすぐには改善できないので、組織としての分担協力体制を整えていかなければならない。
	③危機管理意識を高め、緊急時にも適切に対処できる学校組織を構築する。	【努力指標】想定される危機や生徒問題への対応の仕方が把握できたと考える教員の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	研修会により、具体的な危機や生徒問題への対応の仕方が把握できたと考える教員の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	A (100%) A 81.0% B 19.0%	成 果：能登半島地震の影響や反省から、校務運営委員会等で現在の学校施設の状況を把握し、その状況下での大規模震災発生時の想定を行った。また、自然災害発生時の生徒安否確認調査を Google フォームで配信できるようにし、訓練と実際に使用する機会があった。生徒の震災後の心のケアについては、県教委のオンライン研修や、生徒へのこころのサポート授業を実施した。S C 高先生が月 2 回来校し、希望者へのカウンセリングと 1 年生全員の面接を実施した。 課 題：自然災害のみならず、防犯や感染症等への対応など総合的な危機管理が求められるが、水道、トイレ、暖房設備、校舎の破損箇所の修繕や復旧が進んでいない状況下にある。 改善策：学校の諸課題について、職員全体で共通認識を持ち、具体的な事案に対処していく。
学校関係者評価委員会の評価		・生徒が主体となった授業展開がなされるよう、教職員内で共通認識を持って互見授業等により授業改善を継続してほしい。 ・震災からの復旧復興については長期間に及ぶと考えられる。学校の安心安全と学校職員の健康が保たれるよう教育活動をすすめてもらいたい。			
評価結果を踏まえた今後の改善策		・様々な危機対応について、職員内での連携と共通認識を図ることで、学校の安心と安全が保たれるように努める。			